

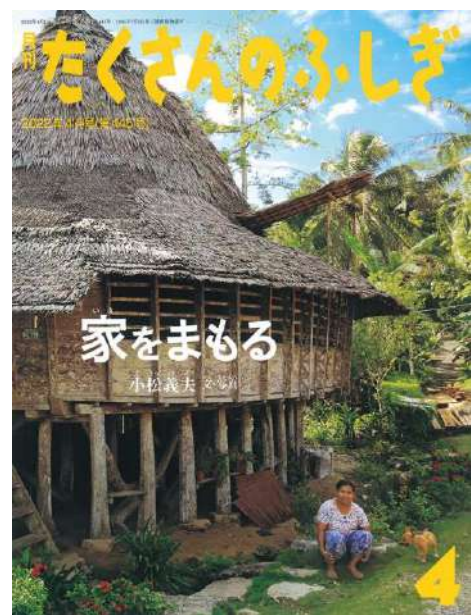


オギジビを訪れるお子さんたち、待合室ではオギジビ文庫の絵本を楽しんでくれています。毎月新刊が届く『こどものとも年中向き』と『かがくのとも』、そして『マスター選書』を手取るお子さん、自分のお気に入りの絵本を引っ張り出して読んでいるお子さん、様々です。私も絵本マスターの紹介POPとともに毎月楽しんでいきます。

さて2022年度、私は『たくさんのふしぎ』と『母の友』を購読していました。『たくさんのふしぎ』は2021年度から継続、『母の友』は“子ども見つめるシゴト”のコーナーの取材を受けたことと、福音館書店70周年記念で毎月人気絵本のカレンダーが付録としてついていたので購読しました。

カスタネット通信3月号では『たくさんのふしぎ』から1冊ご紹介&絵本について思うこと、を書きたいと思います。

## 家をまもる 『たくさんのふしぎ4月号』



自然災害や外敵などから身を守ってくれる家。住んでいる人を守るためにどのような工夫がされているか、13カ国の家が紹介されています。例えば、インドのジョードブルという町の家は壁は虫よけのためにインディゴを染料として使っているため町全体が青いとか、日本と同様に地震が多いインドネシアのニアス島の家(表紙の家)は木をバネのように組み合わせることで地震による上下の揺れを吸収して家を守るなど、その地域の特徴に合った家づくりがされています。

中国江南省には菊徑(ジュージン)村という、三方を川、残りの一方を山に囲まれたロールプレイングゲームに出てきそうな村があります。水に守られているこの村は、家々が密集しているため泥棒よけと延焼防止のために、屋根の側面に“壁櫓(ビンヤン)”という仕切り壁があります。日本にも似たような屋根壁がありこれを“卯建(うだつ)”というそうです。“卯建”と聞いて思い浮かぶのは“うだつが上がらない”ということばです。卯建を上げるためにはお金がかかり、これが上がっている家は比較的裕福な家だったため、「出世できない」「状態が今ひとつ良くない」という意味の「うだつが上がらない」の語源のひとつになったと考えられているそうです。

オーストリアのホルツガウ村にはキリスト教の聖人やキリストのフレスコ画が壁に描かれた家が多くあるそうです。これはヨーロッパで流行した黒死病をさける願いを込めて描かれたのではないかとされています。「疫病封じ」と「絵」、何か思い出すものがありますね。今も昔も、何か悪いことが起こった時には医学や科学だけではなく、違うものに頼りたくなるのでしょうか。

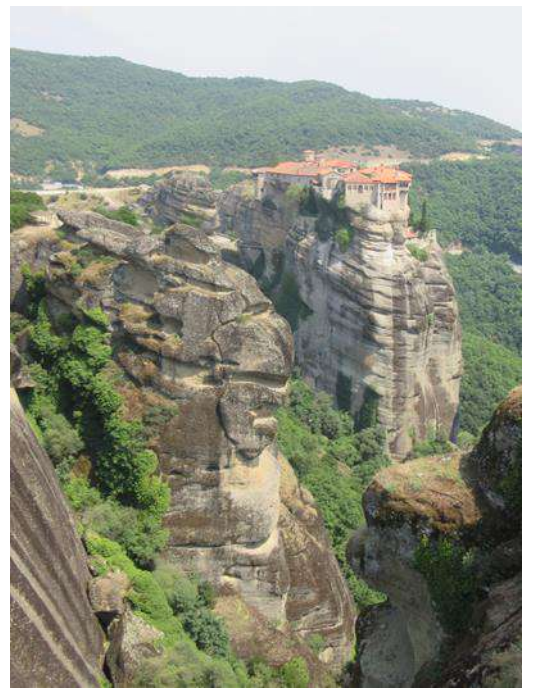


『肥後国海中の怪(アマビエの図)』  
(京都大学附属図書館所蔵)

イタリアのプロチダ島、フランスのコルシカ島などの城塞都市も紹介されています。崖の上の建築物として思い浮かぶのは、2015年アテネで開催された国際ろう教育学会(ICED、International Congress on Education of the Deaf)後に寄った、メテオラ修道院群です。アテネから時刻表通りに全く運行しない電車でカランバカという町まで行き、そこからはタクシーで案内してもらいました。「メテオラ」はギリシア語の「中空の」を意味する「メテオロス」という言葉に由来しユネスコ世界遺産(文化・自然複合遺産)に登録されています。アメリカのロックバンドのリンキンパークがメテオラ修道院の写真を見て触発され、セカンドアルバムの



タイトルに採用したことでも知られています。「外敵から身を守る家」というより、ギリシア正教の修道士が厳しい環境に身を置いて修行するという意味合いが強そうです。しばらくは海外に行くことは難しそうですが、家を通してその地域の生活に思いをはせるということも面白いなと思いました。



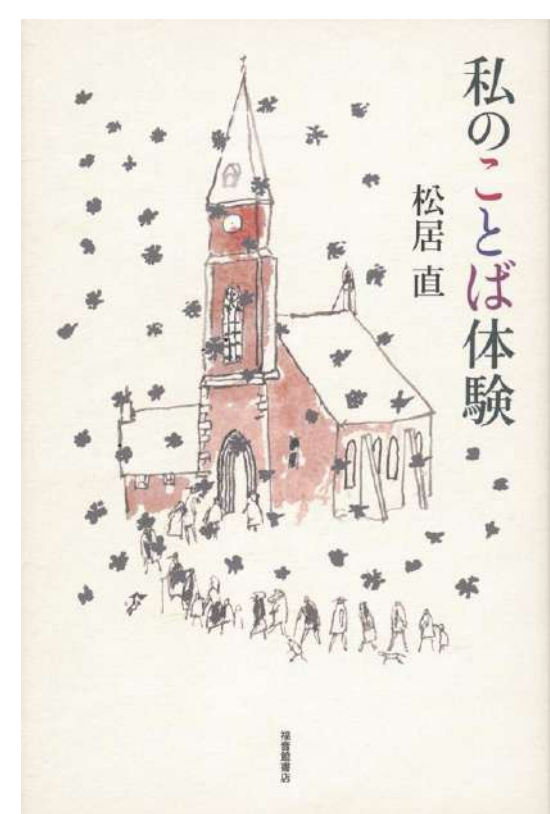
来年度の月刊誌は『こどものとも年少版』と『かがくのとも』を予定しています。楽しみです。2022年度の『こどものとも年中向き』と『かがくのとも』のひと言感想は診察室側の壁にポスターにして貼り出しております。ぜひご覧ください。“かがく”といっても海洋生物、乗物、動物、食品、植物などレパートリーは幅広く、お子さんに色々なことに興味を持ってほしい、お子さんがどんなことに興味を持っているか知りたい、といった場合にはぴったりです。他にどんな月刊絵本があるか知りたい方は、オギジビ文庫付近においてあるこどもの友のチラシをご覧ください(月刊絵本宣伝部員のようなのですが)。

## 蘇る記憶



昨夏、Bunkamura ザ・ミュージアムで開かれた「かこさとし展 子どもたちに伝えたかったこと」を見に行きました。かこさんがこれまでに描いた絵本の原画や、その絵本が作成されることになった背景が展示されていた他、かこさんの原点ともいえるセツルメント活動時代の紙芝居、珍しい油彩作品などもありました。

展覧会の出口にはグッズ売り場があり、カレンダー、メモ帳、マスキングテープ、バッグなどをしこたま買い込んだのですが、そこで1冊の本が目にとまりました。『だるまちゃんにとらのこちゃん』です。ストーリーの細部は覚えていませんでしたが、だるまちゃんにとらのこちゃんがお絵描きをするために黄色土と赤色土に水を混ぜて作った、どろの絵具と土のペンキのねっとりとした感触がブワーツと蘇ってきました。もちろんこの絵本を読んだ子どもの時、土のペンキを作ったわけではないのですが、砂遊びが好きだった私は“だるまちゃんにとらのこちゃんのペンキづくり楽しそう”、“私も土をぐじゃぐじゃ、ぺちゃぺちゃ混ぜてお絵描きしたい!”と思ったのでしょうか。



福音館書店の設立に参画し、編集者として多くの絵本を世に送り出した松居直さんは『私のことば体験』の中で、「大人は絵の表面しか見ていないけれども、子どもは絵の中をぐーっと読む」「(絵本は)まったく違う世界に連れていってくれるんです。現実の世界からもう一つの非常にリアリティの感じられる世界へ」と述べています。子どもの頃の私はだるまちゃんにとらのこちゃんと一緒に、土のペンキで街中に絵を描いていたのかもしれない。

「わたしのことば体験」には、多くの絵本作家、児童文学者、詩人、翻訳家などが登場します。その方々が関わった絵本がオギジビ文庫にもあります。絵本が作られた背景を知って読むと、また違った感覚が味わえるのではないかと考えました。子どもの頃に読んだ絵本、お子さんに読んであげた絵本など、おとなの皆さんにもぜひ手に取っていただきたいと思っています。その時の感触や気持ちがブワーツと蘇ってくるかもしれません。